

# ミハル通信が古河C & Bの事業継承

## 放送局向けビジネス拡大

### IP・RF伝送装置など提案 NHK、民放全方位に事業展開

ミハル通信(神奈川県鎌倉市)は1日、古河C&B(以下、FCB)の全事業を譲受した。3日、ミハル通信の中村俊一社長と、FCB社長でミハル通信執行役員常務 放送事業統括本部 本部長の篠田誠也(のぶや)氏が今後の事業方針、FCBの事業継承に伴い移設した東京タワーアンテナモニュメントなどについて説明した。

古河電工は1950年しており、58年に東京タワースカイリーのFM放送用送信アンテナ(NHK、J-WAVE、TBS、文化放送、ニッポン放送)もFCBが担当し、全国各地の中継局のアンテナも数多く手掛けている。



ミハル通信の中村社長(左)と篠田執行役員常務(後方は東京タワーアンテナモニュメント)

通信向けでは、古河電工が58年にNTT向けにマイクロ波を伝送するパラボラアンテナを納入して以来、電波を届ける導

波管を含め一貫した事業を展開。FCBはこれまで無線部門の事業を継承する形で92年に分社化・設立した。

FCBの事業を継承した中村氏は、「ミハル通信では、放送局用の光バックアップシステムなどで放送局に納入実績が増えてきている。空中線からIP、さらには5Gというように、新しい技術へのマイグレーションが、FCBとコラボすることで加速できる」と判断し、FCBの事業を継承することにしたと話す。

またFCBがNHK主体であったのに対し、ミハル通信は全国の民放テレビ局に製品展開していることから、今後、NHK、民放全方位の事業展開ができるという。中村氏は、FCBの民放キー局とのつながりにも期待していると述べた。

東京タワーアンテナモニュメントを移設

鎌倉本社の敷地内に移設した。これは2011年3月11日、東日本大震災の地震によって生じた「むちふり現象」により曲がってしまった塔頂部アンテナの一部。

篠田氏は、「震災発生時、FCB社員が東京タワーの定期点検をしていた。11年という年は、7月24日にアナログ放送の停波を控え、またアナログ放送受信している家庭も多かった時期。その中でテレビは災害情報を伝える重要なインフラであり、FCBは社員総出で不眠不休の復旧作業にあたった」と当時を振り返る。

篠田氏はこのアンテナモニュメントについて「放送インフラの重要性を心に刻み、震災の際も放送電波を出し続けられるよう、設備の保守・メンテナンスを継続していくことの重要性を示してくれる存在」と話した。

TBSがR & D促進の専用スペース開設

デザインセンターが空間設計

がひざを突き合わせて、さまざまなアイデアを出し合う場を用いている。

加えることで、参加者のパーソナルカラーを作り出すというのだ。単語に対して自動的に色を割り当てるアルゴリズム

を加えることで、参加者のパーソナルカラーを作り出すというのだ。単語に対して自動的に色を割り当てるアルゴリズム

を、